

変わらないもの

古堅中学校3年 宮里純菜

今年の慰霊の日で、沖縄は戦後六十三年を迎えます。その中で、確実に薄れている戦争の記憶と、隠されていく戦争の事実がある。変わり続ける社会の中で、私たちは何を守り、何を伝えていけばいいのだろうか。

私が沖縄戦に興味を持ったのは、小学校五年生の時だ。ちょうどこの頃から、具体的な沖縄戦や平和についての授業が始まる。戦争体験者の方の話を聞いたり、資料館へ行った、自分達で調べた結果を発表する平和集会にも積極的に参加して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学んでいった。また、実際にガマの中に入ったこともある。ほとんど死者が出なかったシムクガマと、たくさんの死者を出したチビチリガマに入っただ。

シムクガマでは、皆について行くことができたのだが、チビチリガマでは、なぜかそれができなかった。歩くのが怖いというよりも、

先に進むのが怖かった。鼓動が早くなり、頭痛がしてきて、立っているのがやつとの状態。結局、バスの中で一人休むことになったのだが、バスに戻るまでの間、先生がゆつくりと戦争について話してくれた。

「戦争は二度としてはいけないことだよ。でも、僕たちにアメリカを責める権利はないんだ。僕たち日本人もたくさんアメリカ人を殺したからね。憎み合っていては平和なんか生まれないんだよ。」

この時、私は頭痛に氣をとられていて、先生の言葉を半分も聞いていなかった。でも最後の「憎み合っていては平和なんか生まれないんだよ。」という少し悲しいけど、力強い言葉が今でも、私の心に残っている。

よくよく考えてみれば、小学校五年生で戦争に興味を持つのは変なことだが、今でも私は戦争に興味を持っている。興味を持ってから約四年がたつというのに、興味が薄れないのは何故か、以前にも増して興味を持ってい

るのは何故なのか、それは、まだ世界では戦争が消えていないからだろう。テロもなくなっているし、沖縄の基地もなくなっている。いない。

戦闘機が配備され、有刺鉄線が張り巡らされる。米軍兵による犯罪行為。幼い頃に戦争を体験した、私の祖父母は沖縄と米軍の間的事件や事故を見る度に、悲しい目をする。画面を通していても、目を背けたくなるような現実を彼らは自分の目で見たのだ。

耳を塞ぎたくなるような悲鳴を、鼻がもげるような全てが焼ける匂いを、目を背けたくなるような地獄絵図を、全身で感じた。

それでもなお、彼らは生きている。死を選んでいる。果たして今、祖父母の目には何が写っているだろう、耳に流れるのはどんな音だろう、鼻をくすぐるのは何の匂いだろう、感覚の共有はできないから、言葉で伝える。文字で伝える。絵で伝える。写真で伝える。こ

んなにたくさん「伝える」手段があるのに、
変わらない。

戦後六十年以上たっても変わらない、基地
の存在。終わらない戦争。

でも、変わらないんじゃない、変えちゃ
いけないこともある。

戦争の愚かさや、戦争のあった事実は、変
えちゃいけないし、かえることはできない。

変えられない過去の過ちが、二度とおこら
ないように、変えないといけない現実を、変
えるために私達は何ができるだろうか。

過去を認め、現実を見つめ、一人ひとりが
戦争の愚かさや、平和の大切さを伝えながら
生きていくことが、平和な未来へつながるの
ではないだろうか。